

## 「二つの魂」説に見られる

### アウグスチヌスのマニ教解釈について

大 島 春 子

#### I

(1) マニ教はアウグスチヌスの思想形成に決定的影響を与えたものの内の一つである。アウグスチヌスが敬虔な信徒であった母モニカによって、幼少の頃から植えつけられていたカトリック・キリスト教を見捨てて去ったのも、そのキリスト教への回心を最後まで阻んでいたのも、またかれの生涯を貫く思索の中心的テーマである悪の問題の重要な契機となったのも、このマニ教である。

アウグスチヌスはキケロの『ホルテンシウス』を読んで哲学への愛を覚醒された時、カトリック・キリスト教をその外見上の稚拙さの故に離れ、理性による真理認識を標榜するマニ教に近づき、19才の時より10年間にわたりその信徒となったのである。<sup>(1)</sup> その間かれは、マニ教の *Electus* にこそならず、*Auditor* に留まっていたとはいえ、その教義に真理発見の大きな信頼と期待とを寄せ、それへの精進に励み、マニの著作に啓発され、その真理性を主張し弁護して、カトリック教徒をしばしば論破していたのである。<sup>(3)</sup> 10年という長い期間、及びその間のかれの信徒としての積極的な活動からして、かれがマニ教の教義に相当精通していたと推察される。<sup>(4)</sup> またそれだけ深くその思想的影響を受けていたであろう。

こうしたマニ教に対し、かれが回心後まず第一に攻撃を開始したのは当然のことであろう。かれはマニ教の虚偽と誤謬に対して、痛烈な悔恨の情と深い憐みとを交錯させつつ、激しい徹底的な論駁を行い、いくつかの反マニ教文書を次々に著わしている。これらの書を通してわれわれは、マニ

教の教義やその宗教的儀式、及び信徒の道徳的規範等がいかなるものであったかを、かなり充分に知ることができる。こうしたマニ教についてのアウグスチヌスの記述の信憑性は、近年トルキスタンやエジプトで発見されたマニ教の文献についての研究からも確認されている。<sup>(5)</sup> 著者自身が信徒としての生活を10年間も送ったのであり、またマニをはじめとしてマニ教徒自身の言葉をそのまま引用している部分の多い点から言っても、アウグスチヌスの反マニ教文書がマニ教を知る上での重要な典拠であるのは当然であろう。

(2) こうして一般的には、かれのマニ教についての記述の信憑性が確認されているのであるが、この評価を基盤としつつ、われわれがかれの反マニ教文書を読み返す時、その中のある表現をめぐって一つの疑問にぶつかるのである。

それらの文書の一つに『De duabus animabus 二魂論』というのがある。アウグスチヌスはこの小著において、人間のなす悪の原因についてのマニ教教義を論駁している。それによればマニ教では人間に二つの魂を指定している。一つは善き魂であり、絶対的善そのものたる神に由来し、更にその神の実体の一部分であるとされている。他方は悪しき魂であり、これは神とは全く無関係に独立に存在し、神に対立するある原理——それは悪そのものであり闇の族と呼ばれる——に実体的に由来する。これら二つの魂が人間の中に混在しており、人間のなすすべての善はこの善き魂に原因し、すべての悪は悪しき魂に原因するとされている。<sup>(6)</sup>

しかしわれわれが他の反マニ教文書において、アウグスチヌスと討論するマニ教徒の言葉や、あるいはかれが引用しているマニ教の主張と比較する時、上述の内容とは異った教義が述べられているように思われるのである。即ちマニ教徒は、確かに一人の人間の内に対立する善の原理と悪の原理の混在を説いて、人間のなす善・悪各々の源としているのであるが、かれらはその善の原理を神の実体の一部分である魂とし、悪の原理を身体だ

とするのである。身体は神に由来するものではなく、神とは全く異なる至悪の実体に属するものであり、神の実体であるわれわれの魂は今その身体に捕えられあらゆる悪に服しめられているのである。<sup>(7)</sup>そこでわれわれは自身自身、即ち魂を悪から救うために、悪なる身体を忌み嫌いつつそれからの解放を目指さなければならない。

このように『De duabus animabus』に基けば、人間には「善き魂」と「悪しき魂」との二つの魂があって対立しているのであるが、他の書に見られるマニ教徒の言に従えば、「魂」と「身体」とが対立していることになる。マニ教徒自身の言が正しいとするなら、アウグスチヌスの二つの魂という記述はマニ教に対する誤った理解なのであろうか。あるいはむしろ善悪二つの本性と言った方が、適切だったのではなかろうか。

しかしかれのマニ教理解が一般的には正しいと認められ立証されているのであり、性急にこの二つの魂という点について誤解であると断言すべきではないであろう。実際アウグスチヌスは、この二つの魂という表現を単に『De duabus animabus』においてのみではなく、『De haeresibus 異端について』等の書でも明らかにしており、<sup>(8)</sup>更にかれの最後の著書である『Retractationes 再訂録』<sup>(9)</sup>においても少しも変えてはいないのである。しかしながらこの表現に固執するのでもなく、時には二つの精神あるいは<sup>(10)</sup>本性<sup>(11)</sup>と言うこともあり、またマニ教徒との論戦の際、かれらが二つの魂でなく魂と身体とを対立させても、それに何らの注意もしていないのである。それゆえアウグスチヌス自身の意識においては、マニ教が人間の内に措定するのは、「魂」と「身体」との対立ではなく、「善き魂」と「悪しき魂」との対立である、というような二者択一的マニ教理解はなかったということは少くとも言えるであろう。それゆえマニ教徒自身は言わない二つの魂の存在を、アウグスチヌスが極めて自然なマニ教理解である如くに明言している根拠を探求せねばならない。その上で、はたしてこうしたかれの表現がマニ教の主張を正しく伝えるものであるか否かを判断すべきである。

この問題を解明するに当たり、まず第一にマニ教の教義自体がいかなるものであるかを詳しく考察せねばならない。第二にそのマニ教を、アウグスチヌス自身はいかなるものとして解釈し表現しているかを考察してみよう。アウグスチヌスがこれら一連の反マニ教文書を著わしたのは、かれがマニ教に真理を発見する希望を失い、懐疑論に陥み、更にそこから新プラトン哲学の光によってマニ教の虚偽と誤謬を明らかに悟らしめられ、かつキリスト教への理解の道を開かれ、ついにそれに回心した後なのであって、これらの思想的体験を基盤としてマニ教を批判しているのである。従ってそこにはただ単なるマニ教の描写ではなく、新しい思想的哲学的立場からそれを再見した時に浮かび上がるマニ教の新しい像といったものが映し出されていると考えられる。その新しいマニ教像の中にこそ、二つの魂という表現の可能性が存するのではないだろうか。これらの考察を、アウグスチヌスのテキストから、特に反マニ教文書を中心として行なっていこう。

## Ⅰ

(3) 「善き魂」と「悪しき魂」であれ、「魂」と「身体」であれ、ともかく全く相対立する二つの原理が人間の内に存するのは何故であろうか。マニ教はどのような根拠からこれら二原理の存在を説き、またこれらによって何を意味しているのであろうか。更にこれら二原理はいかなる本性を有するものであるか。これらいくつかの問題をマニ教自体が主張するままに明らかにしてみよう。

マニ教は相異り、相対立し、共に永遠である、従って相互に依存関係を有しない独立なる世界の二原理、根源的二実体の存在を説く。そしてそれらにおいて二つの本性を区別するのである。その一つは善であり、他の一つは悪である。前者は神であり、<sup>(12)</sup> 後者は闇の族と言われる。この神と闇の族という根源的二実体をめぐって、マニ教は三つの時を区別している。<sup>(13)</sup> まず「過去ないし前期」と呼ばれる時代においては、これら二つの原理は各

各独立の領域を成し、ただ一辺を接するのみで離れて存在していたとされる。即ち神は、光り輝く神として光の王国を領有し、闇の族はその広大な光の王国の一方に接して闇の王国を領有していたのである。ところがある時、この闇の族が光の王国に対して攻撃を起し侵入を開始したのである。これに対し光の神は狂暴な闇の族の攻撃を阻止するために、自らの実体の一部分を遣わして応戦させたのである。こうして両者の間に戦いが始まったのであるが、遣わされた神の実体の一部分は闇の族に征服され、その内に呑み込まれてしまったのである。但しそのことによって闇の族の狂暴性そのものは抑えられたのである。その結果神の実体と闇の族との混合混在が生じ、その混合から構成され出現したのがこの世界なのである。

それゆえマニ教的「現代」とは、これら両者の混合の時代、言い換えればこの世界において神の実体が至悪なる闇の族の内に捕えられ呑み込まれている時代であり、またその状態から解放され本来の光の王国へ救い出されることを切望している救済の途上にある時代でもある。この救済を成就するのが他ならぬマニ教なのである。

第三の時である「未来」においては、悪に捕われていた善なる神の実体はそれから解き放されて光の国に復帰し、二つの実体は再び独立した領域に分かれて戻るのであるが、もはや闇の族は光の王国に侵入することはできないのである。

マニ教に従えば今われわれは現代にあって、善なる神の実体と悪なる闇の族の実体の混在状態の内にある。即ちマニ教では善なる神のみでなく悪もまた実体として積極的な存在を有するのである。従ってある事物が悪いと言われるのは、それが分有によって悪くなっているというのではなく、その物の実体自体が悪の実体だからなのであり、悪は実体に付帯的な偶有ではないのである。<sup>(14)</sup>この世界に善と共に悪が見出されるのは、それを構成する二原理の故であり、善なる事物は神の実体に属し、悪しき事物は闇の族の実体から成るのである。

世界がこのように善悪二実体の混合から構成されているのと同様に、この世界の内にある人間もまた microcosm としてこれら二つの実体の混在から成っている。マニ教では人間においてはこれら二つの実体は、魂と身体であると考えている。魂は神の実体であって、闇の族の実体である身体の内<sup>(15)</sup>に虜とされ、そのあらゆる悪をこらむっているのである。こうして人間をも含めた世界の内に悪の虜となっている神の実体を、再び光の国へ復帰せしめることがマニ教の究極目標であり救済である。その救いのためにマニ教徒には煩瑣な食物に関する制限や、厳しい禁欲的道德習慣が課せられている。今はこれらについて論じないが、しかしそれらはいずれも魂ないし神の実体が、悪である身体はじめすべて肉的・物質的実体に今以上囚われることのないようにするためのものなのである。

(4) 人間を構成する善悪二実体をマニ教は魂と身体とするのであるが、それはいかなる根拠に基くのか。これを知るには、根源的実体である光の神と闇の族がいかなる本性のものと主張されているかを詳しく吟味しなければならない。人間における二実体は、神及び闇の族と実体を同じくするもの、その部分と言われているのであるから、後者について語られていることは前者にも妥当すると考えられるのである。<sup>(16)</sup>

まず初めに善の実体である神の実体の本性がいかなるものであるか問題<sup>(17)</sup>にしてみよう。第一にそれは神であり、永遠にして侵されざる存在である。神は光の王国を支配し、自ら光り輝き、永遠の固有の光の内<sup>(18)</sup>にある。また太陽も月も神の実体に属するものであって、三位一体の子なるキリストの力と智恵とを宿すものである。<sup>(19)</sup>

この神は善そのものであって、すべて善きものの造り主であり、いかなる可滅的なものもそれから生じることはなく、あらゆる闇・悪は神と全く無関係である。<sup>(20)</sup>それらは神の力によってこの世界に現れたのでもなく、神にその起源を由来するのでもないのである。<sup>(21)</sup>

神はまた不可視的であって<sup>(22)</sup>霊の実体である。マニ教徒は旧約聖書が神の

擬人的形態を説いているとしてそれを嘲笑し、自らは神を非形体的、不可視的、<sup>(23)</sup> 靈的実体と主張していた。

(5) このような永遠なる光としての不可視的靈的、至高善の神に対し、それに相反する実体はまず第一に暗黒、闇である。この闇の勢力は光の領域に一方を接する深遠な闇の領域を有していたのであり、更にそれは闇・水・風・火・煙の五つの洞窟に分かれ、その各々に狂悪な種族が生棲している。<sup>(24)</sup> この闇の族は悪の原理であり、また hyle 質料とも呼ばれている。この hyle には悪のすべての力が帰せられており、卑しく、可滅的・可變的、物質的な事物の原理とされている。<sup>(25)</sup> 更にこの悪の原理はより一般的には悪魔と呼ばれている。<sup>(26)</sup> このように神に対立する悪の実体は、暗黒の種族であり、あらゆる可變的・物質的な事物の原理として hyle であり、また悪魔なのである。

(6) 世界はこれら二実体から構成されており、すべてその内に存在するものの本性はこれらのいずれかに帰属せしめられており、両者の間には明白な対立が生じている。闇と光には何の類似もなく、偽と真理、死と生、身体と魂の間にも何らの類似もない。<sup>(27)</sup> また善きものと悪きもの、高貴なものと卑しいもの、不滅なものと消滅的なもの、不変のものと可變的なもの、神的なものと物質的なもの、これらすべてを同一の原理に帰すことはできない。<sup>(28)</sup> これらの一方は物質的実体であり、他は永遠の実体、即ち全能なる神の実体であると言わねばならないのである。<sup>(29)</sup>

(7) マニ教の言う善と悪の実体がこのような本性のものであるとするなら、人間においてはそれらは当然、魂と身体として把えられねばならないだろう。われわれにあって光であり、靈であり、不滅的であり生命であるもの、それは魂でしかない。こうしてマニ教によれば、われわれ即ちわれわれの魂は、闇の族と戦いそれに征服され服従させられて、あらゆる悪や汚れに巻き込まれている神の実体に他ならない。<sup>(30)</sup> この悲惨な現状からわれわれを解放し神へと復帰させる救い主はキリストである。かれはわれわれの教師

として、今われわれの置かれている状況を明きらかに示しつつ、進むべき道を自らを範として教えたのであり、われわれはこのかれの歩みを自らの歩みとして従って行くことにより悪からの救済を得るのである。即ち、キリストは神に等しい存在にも拘らず人間の似姿を取り、それによってわれわれの魂との類似性を示された。それゆえまたキリストが死の似姿を御自身示され、更に死者から復活されたように、われわれの魂もそのような仕方<sup>(31)</sup>でキリストによりこの死から解放されるであろう。

このような魂に対し、それを呑み込んでいる悪の実体はわれわれの身体、肉である。肉というのは、神の実体が悪との混在状態から脱け出てしまった後に残るかすから、生殖作用によって形成されたものと考えられ、全く汚れたもの、悪そのものに他ならない。これはわれわれ人間の肉のみに妥当することではなくて、あらゆる動物の肉についても言われるのであり、それゆえ肉を食べる者の魂はますます汚れることになるのである。<sup>(32)</sup>

(8) マニ教はこのような善なる魂と悪なる身体の対立を、新約聖書によっても裏づけられると考え、いくつかの箇所を引証している。「神から来たものは神の言葉に聞き従うが、あなた方が聞き従わないのは、神から来たものではないからである」(ヨハネ福音書8章47節)「あなた方は自分の父、即ち悪魔から出て来た者である」(同8章44節)<sup>(33)</sup>「肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である」(同3章6節)<sup>(34)</sup>等はその例である。殊に使徒パウロの書には、マニ教的な心と身体の二元論、その対立争闘が克明に描かれているとして、マニ教はパウロを非常に重んじるのである。「なぜなら肉の欲するところは霊に反し、また霊の欲するところは肉に反するからである。こうして二つのものは互いに相逆い、その結果あなた方は自分で意志することができないようになる」(ガラテア書5章17節)「私は内なる人としては神の律法を喜んでいるが、私の肢体には別の律法があって、わたしの心の法に対して戦いを挑み、肢体に存する罪の法の中に私を虜にしているのを見る。私は何という惨めな人間なのだろう。誰が



この死の身体から私を救ってくれるだろうか」(ロマ書7章22—24節<sup>(35)</sup>)。更にパウロは魂と身体の対立が、結局は身体の根源である闇の族そのものに対する対立であり、世界全体の悪と戦うにはただ身体のみが相手なのではないことを次のように語っている。「戦いは肉や血に対してのみではなく、首領や権力に対する戦い<sup>(36)</sup>でもあり、邪悪な霊や闇の支配に対する戦いでもある」(エペソ書6章12節)。

(9) このようにマニ教の心身二元論、霊肉二元論は新約聖書をもその一つの背景としているのであるが、物質を悪とする点に関してマニ教は前述の如くギリシャ哲学の質料の概念をも引き入れているのである。

こうしてマニ教の善の実体は神であり光であり霊であり、人間においては魂として現れている。また悪の実体は、闇の種族であり、物質であり、悪魔とされていて、人間の身体はこの実体から成っているのである。

### Ⅲ

(10) それではこのようなマニ教の二元論に対するアウグスチヌスの解釈を考察してみよう。マニ教徒としてマニ教を語るのではなく、言わばそれを止揚したものとして再論しているかれのマニ教把握は、単なる紹介的記述ではなく、「解釈」であると言えるだろう。

それではアウグスチヌスは善の原理なる神の実体をいかに解釈するようになったであろうか。マニ教によればそれは霊的精神的実体である。しかしアウグスチヌスはこの主張を否定するようになる。というのは、あらゆる物体、物質の実体的根源である闇の族は必然的にまた物質的・形体的でなければならないが、もしそうであるなら、この闇の族の領域と境界を接する光の国、即ち光の神の実体もまた物質的形体的でなければならない。両方の実体ともに形体的でないならば、境界を接するなどということはありえないからである。従って闇の族のみが物体的であるばかりでなく、非形体的・霊的であると考えられている神の実体もまた形体的でなければなら

らない。<sup>(37)</sup> マニ教の霊なる神は、人間の身体の形態ではないが、しかもある形体的なものであり、世界の中に遍在するにせよ、あるいは世界の外に無限に広がるにせよ、<sup>(38)</sup> ともかく空間に存在するものでしかなかったのである。マニ教徒であった時のアウグスチヌスは、一定の空間に延びず広がらず、群がらず、張らず、またこのような延長を有しない、あるいは有することのできないものは、すべて無、全くの無であって存在しないものとしか考<sup>(39)</sup>えることができなかつたのである。このようにマニ教は形体的物体的本性と厳密に区別された、真に非形体的・霊的本性を知らなかつたのであり、それはマニ教徒がただ感覚のみに縛られ、知性認識に到らなかつたからである。このことをアウグスチヌス自身次のように認めている。「しかしながらその当時においては、私は可感的なものを可知的なものから、即ち肉<sup>(40)</sup>的なものと霊的なものを区別し判別することができなかつたのである。」

この区別を可能にして、かれに真の可知的霊的本性を理解させたのが新プラトン哲学であり、この哲学によって感覚から知性へ、可感的世界から<sup>(41)</sup>可知的世界へ、そして一なる神へという神認識の道を教えられたのである。

(II) ところで「二つの魂か、それとも魂と身体か」というわれわれの問題にとってより重要なのは、マニ教の悪の実体についてのアウグスチヌスの解釈である。闇の族はあらゆる物質・物体の実体的根源として hyle と呼ばれ、また悪魔でもあり、人間においては身体であるとされているが、この実体をアウグスチヌスはいかに解釈しているだろうか。

かれはまずこの実体を生命あるものと扱っている。教祖マニの書である「Epistula fundamenti 基本と呼ばれる書翰」の中に「その国（闇の国）には火のような諸物体、即ち破壊的な種族が生棲していた<sup>(42)</sup>」という一節がある。アウグスチヌスはこの「生棲していた habitabant」という言葉に注目して、確かにその種族は生命を与えられて生きていと解すべきだと主張<sup>(43)</sup>している。実際その書において、また他の書においてマニ自身が、この闇の国が闇・水・風・火・煙の五つの領域に分かれ、闇にはヘビが、水には

魚のような泳ぐものが、風には鳥のような飛ぶものが、火には馬やライオンのような四つ足のものが、そして煙には人間のような両足のものが生棲する<sup>(44)</sup>と言うのである。闇の族はこれらの生物として確かに生命あるものであり、アウグスチヌスは煙の族の首領を例にとりてそれを明確にしている。「かれは魂と身体とを有していたのである。即ち生命を与える魂と、生命を付与された身体である。というのは、魂が支配し身体は服し、魂が導き身体は従い、魂が結合させ身体は解体せず、魂が調和良く動かし、身体は肢体の調和ある結合によって堅固なるものとされていた<sup>(45)</sup>からである。」このように闇の族は魂と身体との結合から成る生物であり、従って様々な生命活動を営みうると解釈されている。実際この種族は闇の国にありながらも強力な視力をもって神の国の完全に純粋な光を直視しえたのであり、更にその光を欲求して戦いを開始しようとする意志をも有し、それを遂行する力も備えていた<sup>(46)</sup>のである。

12 悪の実体の解釈に関して同様に重要なのは、それが *hyle* と呼ばれていることに対するアウグスチヌスの批判である。マニ教の高名な教師であるファウストゥスによれば、神がすべての善き事物の原理であるのに対し、*hyle* はその反対の事物の原理であり、*hyle* とはマニ自身によって悪の原理ないし本性に付けられた名である<sup>(47)</sup>。このことはアウグスチヌスが指摘するように、マニ教と異教徒達即ちギリシャの哲学者との類似性を示す、またギリシャ哲学の伝統のマニ教への影響を示すと言えるであろう<sup>(48)</sup>。確かに一般的に言って、物体物質の原理である質料を悪とする点に関しては両者は共通しているのであって、マニ教はこの質料の概念をその闇の族に持ち込んだのである。しかしながらこうした類似性のある半面、両者の質料の捉え方、その悪理解には決定的な相違点も存するのであり、アウグスチヌスはこれら類似点、相違点を的確に見抜きつつ両者を比較しているのである。

「ギリシャ哲学においては *ύλη* は、それ自身は何らの形相もなく、従っ

て感覚も知覚もされえないが、あらゆる物体の形相を受容することができ、この形相受容による変化の現象によってのみ知られる資料である。その哲学者のある者によれば、形相は神に由来するが、*ύλη* は神に由来せず、それゆえ神とともに永遠であるとされている。この点に関してマニ教はこの異教徒と似ているのであって、同様に *hyle* を神から独立したそれ自身の原理において成り立つものとしているのである。しかし *ύλη* を何の形相もない純粹可能態とし、ただ神から形相を与えられてのみ物体を存在せしめるという受動態において把えるその中心的思想に関して、マニ教の質料理解はこの哲学の理解と甚しく異っている。というのはマニ教では *hyle* であると主張する閻の族の中に、五種類からなる数え切れないほど多くの物的形相を措定するのみでなく、更にはこれらの物体を形相づける精神までも措定しているのである。実際マニ教徒はこの精神を *hyle* と呼ぶのであるが、それは形相を受容するというよりも、むしろそれ自身が形相を付与するのである。このように質料というものがいかなるものであるかを知らずに、それに物体を形相づける力を認めているのは全くの愚であり狂気である。<sup>(49)</sup>

マニ教の *hyle* とギリシャ哲学の *ύλη* とは物体の原理即ち質料であるという共通点を有する。更にどちらの質料も、神にその存在を依存せず、それ自身の内に存在原理を有するという点でも共通している。しかし *ύλη* が自分の内に形相を持たず、外から即ち神からそれを受容するという仕方  
で物体の原理であるのに対し、*hyle* はそれ自身の内に形相も有し、自ら神の役をも引き受けて物体を形成するという仕方  
で物体の原理とされているのである。即ちアウグスチヌスの言葉を用いるなら、*hyle* は質料でありながら同時に神として、精神として存することになる。

(13) *Hyle* をめぐるアウグスチヌスのマニ教批判は、かれが新プラトン哲学を学んで後このような明確な形をとったと考えられる。実際かれは、悪の原理とされている *hyle* の本質をこの哲学を通して知ることにより、完全にマニ教の誤謬から解放されたのであり、更にまたこの哲学の *ύλη* を

マニ教の *hyle* と比較することによってキリスト教理解への大きな道を示されたとも言えるであろう。

新プラトン哲学において *ύλη* は存在の世界とは全く異った、非存在そのものであるとされている。存在の世界とは、存在を超える善そのものたる一者としての神から発出した知性及び、それから発出した魂の世界であり、それはまた善なる神の善性を分有する善の世界でもある。そこで善そのものは、存在の根源、存在に不可欠なもの、自足的であり、万物の尺度であり規定であると定義される。存在の世界はこの善を分有してそれ自身も善であるから、悪はただ非存在の内にのみ見出しうることになる。<sup>(50)</sup> しかも、善そのものが付帯的善とともにあるように、悪そのものというものが付帯的悪とともにあるのである。それゆえ、善との対照において、無規定性そのもの、無限定性そのもの、無形相性そのもの、欠乏性そのものと言った悪そのものが、即ち偶有的付帯性でない実体 *ούσια* としての悪がある<sup>(52)</sup> ののである。そしてすべての悪しき事物はこの悪そのものを分有することによって悪くなるのである。<sup>(53)</sup> この悪の実体は善の完全なる欠如であり従って存在と異なる非存在そのものである。プロチノスはこの悪そのものが *ύλη* であるとしている。それゆえ *ύλη* は存在でなく非存在そのものであるが、<sup>(54)</sup> しかしその非存在とは全く存在しないということではなく、何らかの存在のアナロジアを有して<sup>(55)</sup> おり、実体である。

このようにプロチノスによれば存在するものはすべてその存在を善なる神に依存し、従ってすべて善であり、悪は非存在であり善の欠如という極めて消極的な本性である。その点に関してはマニ教の積極的な存在である闇の族とは著しく異っており、マニ教の二元論的存在論はプロチノスの一元論と決定的に対立していると言えよう。アウグスチヌスはこのプロチノス的な質料理解・悪理解に基いてマニ教の悪論・二元論を脱却し批判するのである。

しかしながら、プロチノスが悪の根源を何らかの実体である悪そのもの

としての  $\delta\lambda\eta$  に帰し、またその  $\delta\lambda\eta$  がたとえ非存在であるとは言え、なおある存在であるとし、更にその  $\delta\lambda\eta$  の存在が必然的に要請されているとする点<sup>(56)</sup>において、また、すべての悪がこの  $\delta\lambda\eta$  に原因し、従って  $\delta\lambda\eta$  を分有する事物はその限り悪く、われわれ人間の邪悪・弱さ・無知等の悪も魂の欠陥によるのではなく、 $\delta\lambda\eta$  の付加によるとしている点<sup>(57)</sup>において、かれの悪論はマニ教の悪論との類似性を有しているのである。アウグスチヌスはプロチノス哲学からマニ教の闇の族の積極的な実体存在を批判しつつも、プロチノスの  $\delta\lambda\eta$  が非存在と言われつつもなお有している実体的な悪の根源性に対しては最初から全く無視し問題にもしていないのである。かれはプロチノス的な非存在の代わりに、キリスト教的な絶対的非存在、即ち無を知って、悪を単なる非存在としてではなく、無であると把握するのである。この無という新しい視点を得ることにより、悪そのものと言われる非存在の  $\delta\lambda\eta$ 、善の欠如たる  $\delta\lambda\eta$  もなお形相の受容能力たる限りにおいては何らかの存在を有し、善きものであると見なすようになるのである<sup>(58)</sup>。こうしたアウグスチヌスのプロチノス哲学に対する超克を起因したものは、かれの真理探求の道、回心の道を強固に阻んだマニ教の実体的悪論という誤謬へのかれの鋭い反省と、きびしい警戒心だったのではないだろうか。

⑭ マニ教はまたその悪の実体を聖書に現れる悪魔や神に反抗する力と同一視する。ことにパウロが語っている人間における霊と肉との激しい闘いの状況は、明白にわれわれの内における二実体の対立、即ち魂と身体の対立を証言するものであるとしている。この二元論を聖書の權威に基けるため、換言すればその教説こそ聖書を正しく理解する真のキリスト教であることを立証するために、マニ教徒が引証する聖書の箇所は多く、いずれも一見かれらの二元論を支持する如き印象を与える。アウグスチヌスもマニ教徒時代には、こうした観点から聖書を解釈していたであろうが、回心後カトリック信仰の深化とともに新たにそれらの聖書の箇所を学んで、以前とは異なる解釈を行なっている。ここではパウロの書を例にとって、マニ

教とアウグスティヌスの解釈を比較してみよう。

「というのは肉の思いはかるところは神に敵対している。それは神の法に服していないからである。いや、服しえないからである」(ロマ書 8 章 7 節) という箇所はマニ教によれば正しくその霊肉二元論を立証するものである。即ち神に敵対すると言われている肉は神とは異なる悪の本性に属するもの<sup>(59)</sup>と考えるのである。ガラテア書(5 章 17 節)の「ところで肉は霊に反して欲求し、また霊は肉に反して欲求する。これらのものは互いに対立しているからである。そうしてあなた方は意志するを行なうことができなくなる」という言葉も同様に解釈される。しかしパウロの言葉は、霊と肉の対立を示してはいるが、しかしそれは霊と肉の本性上の対立ではなく、両者の欲求すること、意志することに関する対立である。即ち、マニ教の解釈によれば、霊なる魂が意志するのと同様に、肉なる身体もそれ自身に固有の意志を有するのであり、その意志において両者は対立するのである。つまりその対立は霊と肉という異なる本性を基盤にしてはいるとしても、もはやそうした本性上の対立ではなく、二つの意志の対立、二つの霊の対立<sup>(60)</sup>なのである。それゆえマニ教の肉なる本性とは、単なる物質にとどまるものではなく、魂と同様に、それ自身の意志を有する精神的側面を持つのであり、魂の意志が善なる意志であるのに対し、あらゆる悪しき意志の源なのである。

こうしたマニ教の解釈と異って、アウグスティヌスは二つの意志の対立を二つの相異なる本性、実体に帰すのではなく、人間の二なる魂の意志の方向の対立とする。肉の思いはかるとは、時間的善を欲して時間的悪を怖れることであり、霊の思いはかるとはそれに反して、恒久的善を希求すること<sup>(61)</sup>である。こうした肉の欲は確かにわれわれが可死的身体を有することから生じるのではあるが、しかしそれは肉ないし身体自身が欲求する<sup>(62)</sup>というのではなく魂の意志によるのである。従って「魂の同一の本性が、下位の事物を追求する時には肉の思いを持つのであり、上位の事物を選ぶ時

には霊の思いを持つのである。それは丁度、同じ水の本性が寒さによって凍りつき、熱によって溶けるのと同様である」。それゆえ、雪が熱の加わることによって溶けて水がぬるくなり、もはや誰もそれを雪とは言わなくなるように、われわれが肉の思いを捨て、不変の恒久的善を求める霊の思いを持つ時、われわれの魂は神の法に服しうるのである。<sup>(63)</sup>

このようにマニ教はパウロの言葉を字句通りに受け取って、二つの対立する欲求・意志を、魂と身体という異なる二つの本性を持つ実体に帰し、それによって物質なる身体にも魂と同じ本性、即ち意志し欲求するという精神的霊的本性を認めているのである。

㉔) 以上いくつかの観点からマニ教の悪の実体が回心後のアウグスチヌスによりどのように批判され解釈されたかを見てきたが、それを整理すると次のように言えるだろう。

マニ教では、霊である神に対して、悪の実体は物質的本性とされ、人間においては肉なる身体がそれに属するとされていた。しかし、悪の実体は闇の族という諸々の生物として、生命を有し、様々な生命活動を営む存在である。またそれは物質的本性を *hyle* という名でも表現しているのであるが、しかしそれはギリシャ哲学の *ύλη* としての質料とは遠く隔り、それ自身の内に形相も形相づける神の如き精神をも備えているような質料である。即ち、最高善の神からはいかなる悪も物質的実体も由来しないのであり、あらゆる物質・物体はこの *hyle* により形成されるのである。この形成には神は全く関与せず、すべて *hyle* の働きによるのである。このように悪の実体が物質的本性であると言われつつも、そこに同時に見出される精神的側面は人間における身体のあり方からも認められる。身体は肉の本性であるにも拘らず、魂と同様の意志活動をなすのであり、あらゆる悪しき意志は魂にはなく、身体から起こるとされているのである。

このように見てくると、マニ教は霊と物質の二元論であるとは到底言いきれないことが明らかとなる。霊とされる神の実体も、実は空間性を免れ



ない形体的物的実体であったが、物質と言われる悪の実体は更に物質と言いきれない本性である。それは確かに物質的なもの、物的なものの中に現れてはいるが、しかし単に存在するのみではなく、生命を有し、生命活動をなし、精神活動さえ行なうものである。しかもその存在、生命、精神活動の原理を神に由来するのではなく、それ自身の内に有しているのである。言い換えれば、それは物質・物体としてありながら、同時に魂の、また神のなすすべての働きをなしうるのである。それゆえアウグスチヌスが、マニ教徒の反論にも拘らず、この二元論を、単なる二原理論、二実体論ではなく、善悪二神論であると規定するのにも肯けるのである。<sup>(64)</sup>

このようなマニ教二実体論の不明瞭さは、マニ教が霊的本性と物質的本性についての厳密な理解を欠いていたことに原因する。アウグスチヌスは新プラトン哲学を学んで初めて、存在の源を唯一の神に帰する一元論的存在論を知り、それにより可感的存在と可知的存在の段階的な相違、形体的実体と精神的霊的実体との区別を明確に知ったのである。

新プラトン哲学の存在論からするならば、マニ教の霊的実体も物質的実体も、ともに可感的形体的存在である。更にこの哲学的見地からは到底認められない本性が物質に帰属せしめられており、マニ教のあいまいな魂及び身体についての理解を示しているのである。

(6) アウグスチヌスは魂と身体をいかなる関係のものとして把握しているのであろうか。魂、それはまず生命ある実体であり、更に生命なき実体に内在してそれを生かすところの生命を与える実体である。それと比較して身体とは単に存在するのみの生命なき物体であり、魂より生命を受取ることによって初めて生かされる実体である。それゆえ、身体に生命を与え、これを支配する魂は、身体よりも上位の実体である。<sup>(65)</sup>ところで魂により生命を与えられて生きているもの間にも上下の段階的秩序が見出される。植物は確かにいくつかの生命活動を有してはいるが、それは生命としては最低の状態に位置する。それに対して動物は植物にない感覚作用を有し、

また強力な肢体及びその運動を有している。しかしその動物の間において人間は他のいかなるものにも優って、最上位の存在である。この人間の優位はその身体に原因せず、魂に由来する。即ち他の動物の魂には存しない何かあるものが人間の魂において、そのものゆえに他の動物は人間に劣るものとされ、服従するのである。この「あるもの」が理性であり、あるいはまた知性的精神、<sup>(66)</sup> 霊と呼ばれるものなのである。

従って魂と身体との間には「生命を与えるもの」と「生命を与えられるもの」という厳然たる区別が存する。魂を持たない身体はそれゆえ生命なき物体であって、単に存在するのみである。逆に生命活動をなす物体は必ず魂によって生命を与えられているのである。またその生命活動は、身体の有する魂に応じて異なり、動物の魂は身体を通して感覚し、またその身体を活発に動かすのが、しかし精神を通して知性認識し、自由な意志の働きを有するのは人間の魂のみである。

魂と身体についてのこのような理解はマニ教には全くない。魂の実体的根源である神のみに生命があるのではなく、それと正反対の闇の族にも生命があり、生命活動がある。魂ではない身体も、魂同様に意志を有し欲求することが可能とされている。しかも闇の族である狂暴な動物も人間と等しい、あるいは人間以上の感覚作用、運動能力、知性認識を有するのである。

従って魂と身体に関するアウグスティヌスの理解からするならば、闇の族や身体である悪の実体にも、生命を与えている魂がなければならぬ。この魂によって、前述したような生命活動、精神活動が悪の実体に可能となるのである。マニ教自身、悪の実体を悪魔や悪霊と呼んだり、また身体に悪い意志を帰すことによって、この実体の持つ精神性を認めているのである。それにも拘らずこの実体を物質とし肉とするのは、その精神が、神の実体における精神とは異って、あくまでも悪しきものであり、物質の内に存するものであるからではないだろうか。それゆえ悪の実体の有する魂は、

神の実体の魂とは異り、あくまで物質・身体の魂としてそれに固有のものであり、それに固有の活動、即ち悪を行ない、悪を意志するものなのであろう。

#### Ⅳ

Ⅶ さてわれわれは以上において、マニ教が善なる神の実体と悪の実体とをいかなるものとして主張しているか、またそれを回心後のアウグスチヌスがどう解釈したかを、いくつかの観点から考察してきた。われわれはこれらの考察に基いて、当初の問題、即ち「マニ教は一人の人間の内に善悪二つの魂があると言い、その一つは神に由来し、他の一つは神に対立する実体に由来するとしている」というアウグスチヌスのマニ教批判は、霊と物質、魂と身体、を対立する善と悪の実体とするマニ教を正しく理解するものか否か、マニ教によれば、人間において対立するのは魂と身体であって、善き魂と悪しき魂ではないのではないか、という間にいかに答えられるであろうか。

マニ教の教義自体の矛盾・非論理性を詮索することなしに、それを全面的に受け入れるなら、アウグスチヌスの言うような「善き魂と悪しき魂」という表現は、少くともかれの扱っているマニ教文献には見出しえない。その意味でこの表現はマニ教そのものをそれに即して叙述するものとは言えないだろう。しかしマニ教を異った立場から、即ち新プラトン哲学並びにカトリック・キリスト教の立場から吟味するなら、そこにマニ教自身の主張とは異ったマニ教の姿が現れてくる。アウグスチヌスの二つの魂という表現はこの新たなマニ教「解釈」に基くものと言えるだろう。

即ちわれわれは先に行なった考察から、霊と物質の実体が決してそうした本性のものとは言いきれないことを明らかにした。特に物質と言われる悪の実体は、闇の族、hyle、悪魔と呼ばれるが、それらの名において意味されているものは単なる物質にとどまらず、生命・感覚・知性・意志を持

ち、神と等しい能動的精神をもって、あらゆる悪を行なう実体であり、従って物体であると共に魂をその内に有するような、あるいはむしろそれ自身魂でもあるような実体である。人間の身体もまた、他者なる魂により生命を与えられるというのではなく、それ自身が魂として自らを生きたものとし、神の実体の魂に対立して悪を意志するような身体である。

それゆえマニ教がこうした本性を物質ないし肉と呼んでいるのは誤りである。しかしマニ教自身は、霊と区別される物質、魂と区別される身体についての真の認識に到っていなかったので、霊の中に物質的本性を、物質的本性の中に霊的本性を、身体の中に魂的本性を持ち込むような誤りをなしているのである。

こうしたマニ教に対し、アウグスチヌスの二つの魂という表現は、むしろマニ教のこのような曖昧さや矛盾を取り除き、その主張を徹底させた解釈ではないかと考えられる。というのはわれわれの身体が単なる物体ではなく、魂をその内にもつ、あるいはそれ自身が魂でもあるような物体であり、それが人間における悪の原理とされるのは、その身体という物質的本性によってでなく、むしろその魂に基く悪い意志のゆえであり、従ってアウグスチヌスが身体に固有な、身体をして悪の原理としての精神活動を行なわせるこの魂を悪い魂と呼ぶのは適切だからである。但しかれば、神に由来する善き魂とともにそれを悪い魂と言う場合、それを全く霊的なものとして身体から切り離すのではない。その魂はあくまで身体に内在するものとして、身体に属するものなのである。<sup>(67)</sup>こうした二つの魂をかれは次のように述べている。「私はマニ教徒に反対して『二魂論』を書いた。かれらは、それらの一方は神に属し、他方は、神と共に永遠である闇の族に由来するものであり、神が造ったのではないと言う。またこれら二つの魂、一つは善く、一つは悪い、二つの魂が一人の人間の内にあるなどとたわごとをいうのである。即ちかれらはこの悪い魂は肉に固有のものであると言い、その肉はまた闇の族に属すると言っている。他方、善き魂は神の進出

的部分から生じたのである。それは闇の族と争い、どちらも混じり合ったのである。そしてかれらは確かに人間のあらゆる善をか(68)の善き魂に、あらゆる悪をか(68)の悪い魂に帰するのである。」

またアウグスチヌスはこの二つの魂という表現にのみ固執するのではない。マニ教徒と同じく魂と身体と言ったり、また二つの精神あるいは二つの本性という表現を取ることもある。しかしこれらの表現が意味しているのは、霊と肉の厳密な意味での本性的対立ではなく、魂と、身体を悪の原理たらしめている身体に内在する精神、ないし身体の精神的側面との対立である。それゆえ、二つの魂という表現はこれらの表現と矛盾するものではなく、それらを更につきつめた表現であろう。

それゆえ、このアウグスチヌスの表現は、マニ教教義をそのまま記述するものではないが、決して誤解ではない。むしろマニ教の主張をその不明瞭さや矛盾を取り除き、論理的に徹底させたものとして、正確な解釈と言えるのではないだろうか。(69)

## 註

- (1) Six traités anti-Manichéens, Oeuvres de Saint Augustin, vol. 17, Desclée de Brouwer, 1961, P. 41
- (2) Contra epistulam fundamenti, V : 6
- (3) De duabus animabus, IX : 11
- (4) J-O meara, The Young Augustine, Longman, Green & Co. 1954, P.63
- (5) Dictionnaire de théologie catholique, PP. 1856—7  
The De Haeresibus of Saint Augustine, (by Rev. L. Müller), The Catholic University of America press, 1956, PP.160-1
- (6) De duabus animabus, I : 1, XII : 16
- (7) Contra Fortunatum, 14, 21, 33
- (8) De haeresibus, 46

- (9) Retractationes, I : XV : 1
- (10) Confessiones, VIII : X : 24
- (11) Confessiones, VIII : X : 22, 23
- (12) De haeresibus, 46
- (13) Six traités anti-Manichéens, P. 764, note 5
- (14) Contra secundam Juliani responsionem, op. imp. (III:CLXXXIX)
- (15) De moribus Manichaeorum, X : 19—XVIII : 66
- (16) Contra Felicem, II : XV
- (17) Contra Fortunatum, 3
- (18) Contra epistolam fundamenti, VIII : 16
- (19) Contra Faustum, XX : 2
- (20) Contra Fortunatum, 3
- (21) ibid. 19
- (22) Contra epistolam fundamenti, XI : 12
- (23) Confessiones, III : VII : 12, V : X : 19
- (24) Contra epistolam fundamenti, XV : 19, XXVIII : 31
- (25) Contra Faustum, XX : 3
- (26) ibid. XXI : 1
- (27) Contra Fortunatum, 14
- (28) Contra Faustum, XX : 3
- (29) Contra Fortunatum, 14
- (30) ibid. 9
- (31) ibid. 7, 8
- (32) De moribus Manichaeorum, XV : 37
- (33) De duabus animabus, VII : 9
- (34) Contra Fortunatum, 19
- (35) ibid. 21
- (36) ibid. 22

- (37) *Contra epistulam fundamenti*, XXI : 22  
(38) *Confessiones*, VII : I : 1, V : X : 19  
(39) *ibid.* VII : I : 2  
(40) *De duabus animabus*, IX : 12  
(41) *Confessiones*, VII : XVII : 23  
(42) *Contra epistulam fundamenti*, XXVIII : 31  
(43) *loc. cit.*  
(44) *loc. cit.*  
(45) *De moribus Manichaeorum*  
(46) *ibid.* IX : 17  
(47) *Contra Faustum*, XX: 3  
(48) *ibid.* XX : 4  
(49) *ibid.* XXI : 4  
(50) *Enneades*, I : VIII : 2  
(51) *ibid.* I : VIII : 3  
(52) *loc. cit.*  
(53) *loc. cit.*  
(54) *ibid.* I : VIII : 5  
(55) *ibid.* I : VIII : 3, 5  
(56) *ibid.* I : VIII : 7  
(57) *ibid.* I : VIII : 5  
(58) *De natura boni*, XVIII : 18  
(59) *Expositio quarumdam propositionum ex epistula ad Romanos*, XLIX  
(60) *Confessiones*, VIII : X : 22-23  
(61) *Expositio quarumdam propositionum ex epistula ad Romanos*, XLIX  
(62) *Epistula ad Galatas*, 46  
(63) *Expositio quarumdam propositionum ex epistula ad Romanos*, XLIX  
(64) *Contra Faustum*, XXI : 1, 3

(65) De libero arbitrio, I : X : 20

(66) *ibid.* I : VIII : 8

(67) Contra Faustum, XX : 15

(68) Retractationes, I : XV : 1

(69) The De Haeresibus of Saint Augustine, P. 172, note 189